

# 冊子『北大に求めた処置と責任』

―冊子『真相を知ってほしい』補訂第二版

## はじめに

本冊子は、既刊『スパイ冤罪 宮澤・レーン事件 真相を知ってほしい』補訂版（2014・2・22発行）の続編として、補訂版後の動きを検証すべく編纂したものです。

中で、宮澤記念賞に関しては、本会が2013年2月22日付で北海道大学（北大）当局に申し入れた基本要請（要求）に対する「回答」の形をとっておらず、実際にも学内賞に拠った北大内事業としての側面が濃くみられますが、経緯において実質かわっておりしますので、あえて分離することなく、「回答」として扱うことにしています。

また「心の会」建碑に関しても、ここでの北大との関係は、建立敷地の無償提供を要請するという関係に限られており、基本要請（要求）で北大に求めている「処置と責任」とは次元を異にしますが、包括的意味合いにおいて「回答」として扱うことにしています。

なお冊子の表題は既刊の「北大の求めた処置と責任」から「北大に求めた処置と責任」に変えました。既刊においては北海道帝國大学の求めた処置の解明と責任の追及に重きを置いていたのに比し、今回は国立大学法人・北海道大学として果たすべき処置と責任に主たる視点を置いて編纂したことによります。既刊の略称を「既補訂版」とします。

一連の回答は、文書、対面（口頭）、のほか、電話による問い合わせ

合せへの実質的な回答も含め、計十回にわたっておりませんが、その内容は、宮澤記念賞以降、とりわけ乏しく頑なで、実質、門戸を閉ざしていると受け止めざるをえません。しかしながら、そのような姿勢が許されるわけもなく、引き続き北大当局の翻意を促し、先の戦争から今日に至る北大としての社会的責任を踏まえた、正面からの回答をなすよう強く求めております。

2015年12月8日

## 名誉回復と全資料の公開と生涯顕彰を

本会が北海道大学（北大）に求めたのは、北大生・宮澤弘幸に関わる「退学撤回による名誉回復」と、関連する「全資料の公開」等、および生涯顕彰にあたっての連携である。これは、それぞれ本会会則の第2条（目的）第4条（事業）1項、同4項に基づく取組みであり、2013年2月22日付の北大総長宛「申入書」によって公開要請している。

以後の経緯については本会冊子『北大の求めた処置と責任』（2014・2・22刊）、本会編『引き裂かれた青春』（2014・9・5花伝社刊）によって詳述されているので重複しないが、2015・2・23幹事会での「活動総括」においては、

「（北大が）宮澤レーン事件を冤罪と認識し、『二度と戦争を起ささせない』との共通意識のもとで、『事件を風化させない』と明

言し、『宮澤賞』創設を含む学内顕彰事業を約束するならば、当然その先には過去現在に至る不明・責任を明らかにして謝罪する、これが常識であり、論理的帰結」

——だと位置づけたうえで、

「今後一番の課題は、北大の『謝罪』になります」と方向づけている。

つまり、「申入書」の条条に対応する直接の「回答」はなされていないものの、当該明言から実質上、名誉回復がなされた状態にあり、その駄目押しが「謝罪」だとの認識である。ここでの「謝罪」の対象は、当の宮澤弘幸が故人であるから、その意を受け継ぐ遺族（実妹・秋間美江子さん）ということになる。

一方、この異様ともいえる頑なさの中で、「宮澤賞」（正式には宮澤記念賞）は、一連の流れとは脈絡ないかのように、突然提示されてきた。外国語の習得に優秀な成績を残し、かつ国際親善の精神にふさわしい北大生を対象に毎年授与し、以て「優れた語学力と国際親善の精神を備えた学生であった」宮澤弘幸を長く記念したいとの趣旨である。

これは一見して、矛盾した対応だ。まるで右手で信頼回復を拒みながら、左手で親善を求めているとわかっていい。

この矛盾の故だろう、提示の仕方も率直さを欠いていた。直接本会に提示するのではなく、宮澤弘幸の実妹である秋間美江子さんに提示し、提示したという事実を本会に知らせる——という不細工で不愉快な小細工に拠っている。

本会としては、宮澤弘幸の生涯顕彰を会則で謳い、北大に対する申入書でも、「宮澤弘幸ら冤罪に屈しなかった関係者一同の顕彰」を要請しているが、今回記念賞の提示は、本会申入れへの回答とはなっておらず、本質においても本会が要請している顕彰と

は性格を異にしている。

しかしながら、この不細工な小細工には、北大がとってきた一連の姿勢と同じものが過不足なく現れているので、その一部始終を含め、一連の経緯を「北大に求めた処置と責任」の枠組みの中で、そのまま検証していくことにする。

#### ◆「宮澤賞」の制定経過と問題点

宮澤賞の提示は、2014年2月21日、北海道大学大学図書館の助教が持参した二通の文書によっている。一通は秋間美江子さん宛てであり、もう一通が本会あてで、これには

「秋間美江子様へ別紙のとおり文書を送付いたしましたので、ご参考まで、貴会にもお知らせいたします」

——とあった。別紙というのは、秋間さん宛ての文書と同文で、賞創設の経緯と概要が書き込まれている。

つまり、形の上では本会を対象外としながらも、実際には無視しえないことから、提示の内容は正確に伝えておく、ということのようだ。

持参した助教は、宮澤弘幸にかかる学内文書の収集・調査に直接かかわった研究者で、三上隆副学長が調査結果をアメリカ・ボルドー在任の秋間さんに伝えたおりにも同行、また、同結果を北大構内で本会に説明したおりにも同席していたから互いに顔見知りの関係にある。

折から本会は、東京・新宿の宮澤家菩提寺の境内にある常圓寺ホールで「宮澤弘幸追悼・顕彰のつどい」を開催（2月21日）しており、集会には秋間美江子さんも参加していたことから、その門前で手渡そうと待ち受けていたのだという。

もちろん、門前で受渡しを済ませてさよならとはならず、会場

ホールの別室で秋間さん共々口上を聞き、文書を開封して質疑も交わしている。しかし本会に対しては建前上、あくまで非公式な対応であり、これが北大の偽らざる姿勢だったと言える。

そこで、本会としてもここでは建前にこだわり、改めて提示の内容等について正式に説明を求める場を設けるよう要請し、二か月余を経た同年5月7日、秋間さん同席のもと北大構内で開かれることになった。北大当局と直接向き合って話し合いの席につくのは、2013年5月に次いで、これが2回目となる。

この席では、建前を超えて意見を交わすこととなり、宮澤弘幸とレーン夫妻らにかかる事件が冤罪であったことを北大として認め、かつ風化させることなく後世に伝え続けることを明言し、また二度と冤罪を引き起こさせないという意味で戦争を起こさせない世の中にしていくよう願うことでも一致を得た。宮澤記念賞についても、毎年の授与の際、賞創設の由来について語り継ぐことを約束している。

賞授与の対象は、英語以外の外国語習得において優秀な成績を収めた者としている。これは既設の賞に「レーン記念賞」があつて、この賞がレーン夫妻に由来し、英語を要件としていることから、「宮澤記念賞」では英語以外を要件としたという。

「レーン記念賞」の創設は、もともとレーン夫妻の教え子たちが、ハロルド・レーンの北大退官（1963年）に際して、既に札幌永住を決めていた夫妻に「住宅を贈ろう」と始めた募金に遡る。これは相応の資金を集めたのだが、その直後にハロルドが病没し、追うようにポリーン・レーンも長期入院の末亡くなったことから、折角の資金が宙に浮き、紆余一転、記念奨学金の創設を視野に北大へ全額寄託されるはこびとなった。

この経緯から、両賞は姉妹賞にも似た関係として定着しうる可

能性も開かれる。北大には、折からの大学の特徴づけに絡めて国際化・グローバル化を志向する流れがあり、その一環としての思惑も窺われるが、秋間さんに異存なく、本会としてもあえて不同意とすることもない。2015年度から実施されている。

ところが、実際に授与された経緯をみると、当会に説明した内容とは違い、創設の由来も社会的意義もそぎ落された単なる学内賞の態様となつてることが分かった。そこで創設に関わった広義の一員として「意見」を明らかにすべきだと判断、文書をもつて申し入れると共に、今後の対応を見定めることにしている。

#### ◆「心の会の碑」（仮称）に対する北大の姿勢

この「宮澤記念賞」とは別に、「真相を広める会」としての顕彰活動には、「心の会の碑」（仮称）建立の提唱があり、その敷地提供を北大に要請している。この限りにおいては、お願いする立場にある。もちろん共有共益の連携関係にあるとの認識だ。

「心の会」（ソシエテ・デュ・クール）については別項にまとめである（11頁【資料①】）が、宮澤弘幸ら有志の北大人らが共に学び人間形成を成していくうえでの基盤となった談論風発の会であり、直接「冤罪事件」にかかわっているわけではないが、より広い視野に立つての記念碑にの提唱である。

提唱の発端は、本会会則第4条（事業）に「宮澤弘幸の生涯を顕彰し」と謳っているところであり、創立総会（2013・1・29）を前にした幹事会（準備会）でも「顕彰を具体化する上で碑を建てるのは意味があり、石は長期記憶に役立つ。北大構内に建てられればベスト」と提起している。

以来、冤罪事件の真相を究め、広める活動を展開する中で、右の「心の会」の存在が明らかになるなど、顕彰すべきは宮澤弘幸

に止まるものではないと認識され、加えて、北大構内には、「心の会」活動の舞台となった外国人教師官舎の跡が小さな林となって残っていることも知れ、また創立総会で代表になった山本玉樹の構想「北大ユマニスムスの碑」が再認識されて、次第に具体化への機運が膨らんだ。

この機運がさらに広がったのは、北大からの最初の対面回答(2013・6・25)を受けて開かれた拡大幹事会(会員有志らの自由参加による集会II 6・26)での議論で、ここでは議論の質も幅も大きく広がった。

中でも、本会の名称に「宮澤弘幸」だけが織り込まれていることに違和感が表明され、「活動対象をレイン夫妻らに広げるべきだ」と、つまり「顕彰の対象を広く捉えよ」との卓見があり、また「北大全体の世論が大事だ」「北大OBが中心に」などと、本会の枠を超えた運動の広がりを目指す意見が注目された。

こうした機運を受け、札幌集会「もうひとつの12月8日」を前にした幹事会(2013・12・7)では、初めて建碑が正式議題となる。既に広範な運動の必要性は共通理解となっていたから本会の目的や取り組みの枠を超えることに異論はなく、

「北大OBをはじめ関係者、市民等に広範に呼びかけて『記念碑』建設運動を開始する」

——との基本方針が決まった。

この方針に基づく具体化は在札幌の幹事が担い、札幌では翌2014年2月5日に検討会を開いて

- ① 碑のタイトルは仮称「心の会の碑」とする
- ② 北大の中に建立を目指すために広く関係者を呼びかけ、期成会のような組織をつくる
- ③ その会には北大に影響力のある人の参加を呼びかける

——との素案を取りまとめた。

これは、東京・新宿(常圓寺ホール)での「宮澤弘幸追悼・顕彰2・22のつどい」を控えた2月幹事会でそのまま了承され、直ちに同集会の「アピール」にも織り込まれ、当面する三本柱の一つとして、以下のように明記されている。

第3 戦前、北海道大学で外国人教師と学生とが交流・研鑽を培った「心の会」の精神を現代に生かし未来に伝えるため、顕彰碑「心の会の碑」(仮称)の建立を期し、広く賛同をもとめる。

引き続き、期成会発足に向けての具体的な準備は在札幌の幹事が担い、折から札幌で開いた「秘密保護法廃棄と宮澤弘幸の名誉回復を求める市民のつどい」(2014・5・6)を前に、次の四人から建碑運動の「呼びかけ人」を引き受ける同意を得た。

丹保憲仁(北大元総長)、中村睦男(北大元総長)、後宮敬爾(札幌北光教会牧師)、加藤多一(童話作家)の四氏で、さらに本会代表の山本玉樹、山野井孝有の二人が加わり、六人が「呼びかけ人」となつて、広く建碑運動の賛同者を募ることになる。同時に、建期成会が成立するまでは、本会が「呼びかけ人」の実務を代行する事実上の事務局を担うことになった。

六氏の名による「呼びかけ文」(2014・5・6付)では

- ① 「心の会」では、国籍や立場の違いを超え、深い信頼と友情に包まれ、何よりも学問の真理と平和を大切にしたこと
- ② そこでは、札幌農学校以来の教育思想である真理に倚って立つ自主独立の自修心が息づいていたこと
- ③ その舞台であった北大構内の外国人教師官舎跡の林の一隅に「心の会の碑」(仮称)を建てるべく、北大当局と

交渉すること

④ その上で、建定期成会を発足させ、平和を願う多くの人たちに建碑への理解と協力・賛同をもとめていくこと  
——などを謳い、先の「市民のつどい」で、全会一致採択されており（13頁【資料②】）、これが建碑運動の基本文書となっている。

続いて翌7日には、北大との2回目となる対面交渉がもたれた。元々は、先の「宮澤記念賞」についての正式説明を受ける場として開かれたものだが、特に議題を制限していたわけではないから、基本申入れに関連する一連の問答が交わされ、この場としては忌憚なく展開した。

その流れの中で建碑についても言及、前日の「市民のつどい」での空気も伝え、敷地の無償提供について口頭で申し入れている。一連の「回答」は必ずしも納得いくものではなく、顕彰の具体化についてもあいまいさを残していたが、大局において受け容れてよいと決断、「宮澤記念賞」と合わせ「心の会の碑」の建立がなれば、車の両輪のごとく、顕彰の実が上げられると判断した。

ところが、議題が建碑問題に及んだ途端、北大（三上副学長）の態度は一転して頑なに戻り、

「現時点では（建碑は）考えていない。北大としてはおそらく応じる状況にはないと思う。一般的に碑は建設当初は大きな関心と呼ぶが、時間が経つと碑の意味が伝わっていかない。

宮澤賞は毎年、宮澤事件について直接学生に語り贈るので、これが最善と判断した。それに、みなさんがいう外国人教師

官舎跡地は大学執行部の管理地ではない。別の部門が管理している」

と、答えている。

この日の流れから言っても、後ろ向きの応答だが、最初の手合わせということで、受け止め、

「碑は、北大OB、市民等に全国的に広く呼びかけて建設する。

戦争に反対し宮澤・レーン事件を忘れない運動として継続し受け継いでいく碑にしていく方針だ。碑建立については、北海道大学としてぜひ理解していただきたい」

と、申し入れている。

この問答を受け、本会としては、賛同者を募る運動に一層の思いで取り組むことに決めた。同時に、北大に対しては5月28日付で改めて文書による敷地提供の申入れを発送している。

賛同者呼びかけへの反響は殊の外だった。実質二か月の間に350人余の快諾を得るに至り、この中には北大の現職・経営委員、名誉教授から札幌市長と影響力ある賛同者も名前を連ねている。また添付意見欄にもぎっしり書き込まれ、これら意見等は本会・会報（第10号）に収録しているが、それによってまた賛同者が増えるという成果をもたらしている。（この取り組みは、2015年10月時点で、1000人を越えている）

半面、北大からは文書での申入れにも回答の気配がない。そこで、9月末の時点での賛同者名簿を作成し、改めて協力を要請する申入書（9月30日付）を添え、北大の窓口である総務課を訪れ、課長補佐（佐藤浩司）へ直接手渡しした。

この時点での北大の対応は見るからに冷やかで、申入書を持参した本会代表（山本玉樹）らを門前に待たせたまま、屋内に

招き入れることもなく、申入書・賛同者名簿を受け取るやくるり背を向けている。

あげく、ようやく10月30日付で、「回答」が郵送されてきたが、中は一枚の用箋に、

「本年9月30日付け文書で申入れのありました『心の会の碑』（仮称）の建立にかかる要請につきましては、応じることができませんので、ご了承願います」とあるだけ。

麗々しく大判の公印「国立大学法人北海道大学総長印」が押された総長名の文書ながら、文字通り一片の断り文であり、断る理由も何も記述されていない。9月30日付申入れでは「話し合いの場を設けてほしい」旨も要請してあったが、これにも無視を通してている。

以来、本会としては、節々に文書または口頭（電話）で翻意を促し再回答を要請してきているが、経緯は以下の通りであり、はかばかしくないのが実情となっている。

■再回答要請書を郵送（2014年11月10日付）

↓回答なし

■電話にて問い合わせ（12月3日）

↓「10月30日付で回答書を送付しましたが、大学側といたしましては回答した通りで、新たな回答はしません」

■「心の会の碑」（仮称）に関する交渉申入れ（12月11日付）  
↓回答なし

■「心の会の碑」（仮称）建立に関する再々申入書（2015年3月5日付）

↓回答なし

■電子メールにて問い合わせ（3月23日）

↓回答なし

■電話にて問い合わせ（3月26日・総務課宛）

問（福島清事務局長Ⅱ以下同）再々申入書に対する回答を3月末日までにいただけるか。

答（佐藤浩司課長補佐Ⅱ以下同）北大としては、昨年10月30日付文書でお知らせした通りである。

問 応じられないということか。

答 そうだ。

問 応じられないのは、話し合いに応じないのか、敷地提供に応じられないのか、両方なのか。

答 両方だ。話し合いにも、敷地提供にも応じられないということが正式の返事だ。

問 それは北大としての正式な態度か。

答 そうだ。

問 宮澤賞についてはどうか。

答 昨年8月、大学として正式に決定した。これから授賞学生の選考をはじめ、6月に表彰式を行う。

問 秋間さんにはお知らせしたか。

答 ……。(知らせることは考えてもいない様子)

問 こちらからの電話で答えたが、31日までに文書または何らかの方法で回答する予定はあったのか。

答 ……。

問 どういう方法で回答するつもりだったのか。

答 いま電話いただいたのでお答えした。なお私は人事異動で交代する。後任は吉田年克だ。

問 誠意を持って回答して欲しいと要請しているのに、これが正式回答であるというなら残念だ。今後については、追って連絡する。

■ 「心の会の碑」（仮称） 建立申入れについて（4月20日付）  
↓ 回答なし

■ 三上隆副学長との話し合いの場を設定してほしいとの申し入れ（10月23日付FAX）に対し、  
↓ 「応じられません」（11月7日付吉田課長補佐との電話）

北大の対応は、このように頑なで、事実上、門戸そのものを閉ざそうとさえしている。この間、本会としては、会の「活動総括」（2015・2・23）をふまえ、建碑運動の仕上げを担う「建立期成会」を遅くとも2015年11月末までに立ち上げる——などの方針を決めたが（2・23幹事会決定）、北大の非協力にあつては停滞を余儀なくされ、2015・12・5幹事会で同期成会立ち上げを断念した。

この間、本会としては、全体的に情勢を検討し直す中で方向を見出さなければならぬと判断、

① 秘密保護法廃止をはじめ、安倍政権の暴走阻止のために、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を広める活動はますます重要になってきている。従つてこの活動をさらに推進する。その活動を通じて本会の団結をさらに固めていく。

② 北大構内での建碑は極めて困難な状況にある。

③ 建碑方針については、北大の峻拒を踏まえた運動再構築が必要になっている。従つて原点に戻つて整理整頓し、遅くも今年11月末までに一致協力の道筋をつける。

④ この間、2・23幹事会後の取組みについて、真相を広める活動を中心に据えて、実施しうるものは実施していく。具体的には事務局長のもとで調整する。

——の四点を確認、賛同者数を1000人超に伸ばすなど運動成果を上げたが、壁にあつた現状を変えるに至らず、建立期成会断念に伴い、「呼びかけ人に対しては碑建立の条件が整わないこと、建碑賛同署名運動を中断することを報告して了承を求める。賛同者へは、何らかの形で報告する」——などの方針を決定。現状をふまえ、今後は手弁当で運動することになっている。

#### 【資料①】

「心の会」（ツシエテ・デュ・クール）について

1939（昭和14）年6月8日、北大・新渡戸通りに近い太黒マチルド宅に寄つた16人で発足した。この時に撮つた写真が残つていて、11人までの顔と名前の一致が確認されている。

参加が確認されているのは、太黒マチルド、ヘルマン・ヘッカ、ハロルド・レーン、ポーリン・レーン、クローラ、フォスコ・マライーニ、トパーチア・マライーニ、大條正義、松本照男、武田弘道、瀧澤義郎、宮澤弘幸。残る4人のうち1人が中国人だったことも推定されている。

【注】本編1頁の右面に写真掲載。

実は、「心の会」についての、まとまった文献・記録は残っていない。確かなのは、大條正義と松本照男からの聞き書き（札幌弁護士会・郷路征記弁護士による）、フォスコと松本による武田弘道

への追悼文(『武田弘道追悼集 会議は踊る―ただひとたびの』ミネルヴァ書房刊)の当該記述、および同じ情報源によると思われる弁護士・上田誠吉著『ある北大生の受難』(朝日新聞社刊)の当該記述などで、必ずしも全貌を伝えるものとはなっていない。

中で、はつきりしているのは、当時、外国人教師用官舎(現在、北大構内東端の雑木林)に住んでいた教師たちが、相互に親睦篤く、また学生・生徒たちに向け開放的だったことがある。

◇  
ヘッカーはドイツ人のドイツ語教師で、毎週金曜日の午後は自宅を開放し、個人授業を行っていた。単にドイツ語を教えるだけでなく、ドイツ古典によってドイツとドイツ文化を熱く語ることで人気だった。出身がフランス国境に近い南部だったからフランス語も母国語同然で、求める者には両国語を教えることが出来た。ただ、ナチス・ヒトラー政権へはあからさまな嫌悪を隠さず、ヒトラーに同調する者を激しく批判している。

レーン夫妻も来る者拒まずで、自宅には絶えず誰かが出入りしていた。ハロルドは敬虔なクエーカー教徒で、第一次世界大戦では兵役を忌避、そんなことがあって国外に職を求めたのかもしれない。ポーリンは宣教師の娘で、日本で生まれ育った。最初の夫は第一次大戦で戦死している。夫妻とも信仰、信念は強く、しかし他人に押し付けることはなく、面倒見はよかった。

フォスコが留学生として北大に来たときも、たまたま教師用官舎に空きがあったことから当局と掛け合い、入居の面倒をみている。追ってフォスコも医学部解剖学教室に無給助手の身分を得て官舎の住人となった。妻トパーチア、長女ダーチア共々、日を置かずしてレーン家とは家族ぐるみとなる。レーン夫妻にも双子の末っ子を含む六人の娘たち(上4人は在アメリカ)が居た。

フォスコの北大での留学テーマはアイヌ民族の種族的起源にかかわる研究だったが、何にでも関心を持ち何にでも才能を発揮する達人で、周囲は、写真家で登山家で旅行家で文化人類学者で等々と思いい紹介している。スキーを通じて武田、松本らと気心が合い、松本の紹介で宮澤弘幸も加わり、写真、登山、旅行と学生らに与えた影響は大きい。

マチルドはフランス人で、旧制・小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)のフランス語教授として教鞭をとりながら、いまだいう母子家庭を切り盛りしていた。大條正義が手弁当の塾「アテネ・サッポロ」を開いたときには顧問を引き受けている。

◇  
学生・生徒の方で中心となっていたのが、この大條正義、あるいは武田弘道たちで、自然発生的に寄り集まってきた談論風発仲間に「心の会」の名を冠したのも大條正義だった。先にあげた郷路征記の聞き書きでも松本照男が「大條の発案」といい、当の大條も「わたしだったかもしれない」と言っている。

大條正義は、松本照男、宮澤弘幸らの二年先輩で、一年休学・留年のうえ、1941年に工学部電気工学科を卒業している。休学は進路に迷って、この間、東京のアテネ・フランセでフランス語を学んでいる。そんなところから *La société du Coeur* (ソシエテ・デュ・クール) とフランス語をもって名づけたのだろう。ちなみに、大條自身は、日本語名は「せつさ会」だと言っている。切磋琢磨の切磋と、フランス語の *cest ca comme ca* をかけたものだ、と。ただ、これは意味が通らない。単なる語呂合わせなのか、それともフランス語の方の意味を考えると、真意は見えてこない。だがまあ、フランス語に強く惹かれた当時の若者たちの空気はそれとなく伝わってくる。



苦学生のクロール（ユダヤ系ドイツ人で数学、量子力学の研究）は「貧乏学生組合」と呼び、ハロルドは各母国語の頭文字を採って並べ「FIDMAG」と名付けている。

もう一つちなみに、当時の北大生は、自分たちの学んだ成果を学びたくても学べない人たちに手弁当で還元する気概を持っていた。先の「アテネ・サッポロ」もその一つで、大條の呼びかけに松本が右腕となって応じ、宮澤弘幸も助教に就いている。

◇

大條によると「心の会」の守るべき決まりはただ二つで、

- ① 仲間同士は、何処で会っても母国語以外で話すこと
  - ② 会場持ち回りで二か月に一回はパーティを開くこと
- だった。

松本によると、ティパーティーのようなものだったといい、またフォスコによると、回数はどうも少し頻度があり、それぞれが自分なりのテーマを決めて母国語以外で発表するのが決まりだったという。要は外国語習得を共通基盤に談論風発の気を養う、という雰囲気だったと想像すればよいのだろう。

もちろん、外国語を学ぶにあたっては、ヘッカーの教え方に見られるように、それぞれの言葉を紡いできた文化と歴史を学び合おうのだから、自ずと目は広く開かれ、器は深く磨かれて人間形成につらなっていく、という循環になる。

おそらく、これら若き群像を見守る外国人教師群には、かつて建学期にクラーク博士がもたらした資質である、自主・独立の自修心と同質の気風が脈打っていて、若き群像との見事な相乗効果をもたらしたに違いない。人種、国籍、思想、信条を超え、教師、学生、生徒の立場をはずして異文化を学び、人間力を養い、表現を豊かにする、そういう集団に育っていたと思われる。

このような集団を当時の治安当局が見過ごすはずもなく、太平洋戦争が迫るにつれ、常時監視の対象にされてもいた。外国人教師用官舎は四戸並んでいて、東側からマライーニ、ヘッカー、レイン、クレンムプと住んでいたが、東側の通りを隔てた商家の二階には特高のアジトが置かれていた。

大條正義によれば「外国人と付き合うことが警察に警戒されることなどの考え方は全くなかった」と言っているが、これはたぶん強がり半分で、フォスコによれば「政治、戦争、軍国主義、平和などのホットな問題には触れられなかった」と漏らしているから、やはり、この方が実際だったと思われる。

したがって、この時期に、「心の会」が存在していたこと自体がほとんど奇跡であり、クラーク建学以来の北大の奇跡がしっかりと根づいていた証左ともいえる。

発足にあたって、学生たちから相談を受けたハロルドは「簡単に会を作るが永続するもの少ない」と諭したといい、それだけに戦時下ぎりぎりまで頑張ったのだと思われる。いつも洗い立ての詰襟のボタンをはめた大條に、弊衣破帽ながらおしやれもはめ武田、さまざまな個性が切磋していたのは確かなようだ。

大條は卒業後、陸軍の短期現役を志願し、戦後、弁理士として独立。武田は予科（医類）卒業後、京大・哲学に転じ著名な哲学者となったが65歳のとき転倒事故がもとで急死している。

◇

会発足の記念写真は、『武田弘道追悼集』のフォスコの文に添付されており、これが公表の最初と思われる。シャッターを押したのが誰かは分からない。もし、当時、自動シャッターが開発されていれば、フォスコが三脚据えて仕掛けたのかもしれない。

【資料②】

建碑にかかる基本文書

《6人の「呼びかけ人」による呼びかけ文書》

仮称ながら碑名を「心の会の碑」と名付けて建碑を提起した由来・背景を端的に伝え、運動の方向性を明示したことで、本件運動が依拠する基本文書となっている。

「心の会の碑」(仮称) 建立にご協力を

「宮澤・レーン」スパイ冤罪事件」のような出来事を二度と起こさせないために

呼びかけ人

丹保 憲仁(北海道大学元総長)  
中村 睦男(北海道大学元総長)  
後宮 敬爾(札幌北光教会牧師)  
加藤 多一(童話作家)  
山本 玉樹(真相を広める会代表)  
山野井孝有(真相を広める会代表)

1941年12月8日、アジア・太平洋戦争開戦の日、北海道大学工学部2年生宮澤弘幸さんは、アメリカ人教師レーン先生御夫妻と共に軍機保護法違反すなわちスパイ容疑で検挙され、その後3人とも懲役15年などの重い刑を科せられました。

根室の海軍飛行場のことなどは誰もが知っている事実であるにもかかわらず、「軍機」を「探知」し「漏泄」したからというのです。いわゆる「宮澤・レーン」スパイ冤罪事件」であり、他に

北大助手ら3名の者も続けて検挙され有罪とされました。

レーン先生御夫妻はその後1943年に日米交換船で帰国、戦後1951年北大に復帰して多くの学生に平和への願いを伝え、札幌の地で亡くなりました。

北大生のみならず他大学の学生や多くの市民たちが、レーン先生御夫妻の温かい人柄と無私の施しに大きな感銘を受けたのでした。一方宮澤さんは、恐らくは拷問と脅迫の中、北大生としての誇りを胸にスパイの容疑を否認しつづけましたが、やむなく退学に追い込まれ学問研究の途を閉ざされてしまいました。

敗戦後1945年10月に釈放されたものの、過酷な拘禁がもとで衰弱、病身となり、1947年に27歳の若さで亡くなりました。アメリカ在住の実妹秋間美江子さんは兄の名誉回復を強く望んでいます。

戦時中、北大で教鞭をとったレーン先生、ヘッカー先生、太黒マチルド先生、マライーニ先生ら外国人教師を中心に、多くの学生たちが彼らのもとに集りました。その集りはいつしか「ソシエテ・デュ・クール(心の会)」とよばれるようになりました。

彼等は国籍や立場の違いを超え、深い信頼と友情に包まれ、何よりも学問の真理と平和を大切にしました。日米開戦に踏み切った政府は、自由な精神と人間性にあふれたこの集まりを恐れたのです。

ここには、札幌農学校以来の教育思想である真理に倚って立つ自主独立の自修心が息づいていました。この精神こそ、クラーク先生から内村鑑三・新渡戸稲造・宮部金吾らへ、そして多くの卒業生へと誇り高く受け継がれてきたものであり、人間性を否定する戦争を根底において拒否する思想でした。

私たちは北大構内の外国人教師官舎があった林の一隅に「心の

会の碑」(仮称)を建て、「スパイ冤罪事件」の犠牲者の名誉を回復し、レーン先生をはじめとする外国人教師と宮澤さんらの非戦・平和の営みを顕彰したいと考えています。それこそが、再びあの痛ましい事件を引き起こさせない誓いのシンボルとなるものだと考えます。

今私たちは「心の会の碑」(仮称) 建立期成会の結成を準備しています。北大当局との交渉を進め碑建立の条件が整った時点で期成会を発足させ、同窓会など関係者はもちろん、平和を願う多くの方々に、広く碑建立への「ご理解と」協力をお願いする予定です。皆様のご賛同を心よりお願い申し上げます。

2014年5月6日

連絡先

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会

### 【資料③】

#### 《呼びかけ6人の実務代行から賛同者への報告》

建碑運動を呼びかけて、ほぼ一年がたち、その到達点と現状を報告し、先行きを明らかにした事実上の「中間総括」となっており、発足時「呼びかけ文書」と並ぶ基本文書となっている。

☒ ☒

「心の会の碑」(仮称) 建立にご賛同いただいた皆様へ

経過報告と今後の方針について

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会

事務局長 福島 清

本会は、昨年5月、北海道大学構内に「心の会の碑」(仮称)の建立を期し、広くご賛同を呼びかけた丹保憲仁・中村睦夫・後宮敬爾・加藤多一・山本玉樹・山野井孝有六氏の実務代行を務める事務局でございます。

以来、今年4月15日現在で502人の皆さまからご賛同いただきましたこと、心から感謝申し上げますと共に、いまに至るも、建立期成会結成に至っていないこと、深くおわび致します。

建碑の対象である「心の会」(ソシエテ・ドユ・クール)は、若き北大生と外国人教師たちが、国籍や立場を超えて人間的な交流を深め、学問の真理追求の精神を育んだ場でありました。それは太平洋戦争の前夜に至るまで続けられ、そのゆえに国家権力によって不当にも狙い撃ちされ、同会の一員であった宮澤弘幸とレーン先生夫妻が検挙され冤罪の被害者となりました。

これが国家権力による冤罪であることは、現北大当局も認めるところであり、「心の会」の教室でもあった外国人教師の官舎跡が雑木林となっていることから、建立地として最適であると考え、昨年9月30日には354人(当時)の賛同者のお名前と共に敷地の提供を文書にて北大当局へ要請致しました。

今年「戦後70年」です。戦後70年を回顧することは、同時にあの悲惨な戦争がなぜ引き起こされたかをも、合わせて直視するべきです。その視点にたった時、日中戦争下でかつ太平洋戦争直前の時期、北海道帝国大学で外国人教師と学生たちが真に心を開いて交流を重ねたことの意義、極めて大きなものがあると考えます。

安倍政権下で国民を再び戦争への道に引き込む策動が強行されている今こそ、「心の会」の精神を広く社会に訴えるべきであると考えます。

ところが、北大当局は同年10月30日、何らの理由をも示すことなく「応じることはできない」と一片の文書にて拒み、その後再三の話し合い要請にも応える姿勢をみせず、今年3月26日、直接電話にて問い合わせたところ、「10月30日付文書の通り」と頑なで、取りつく島もない対応でした。しかも、こちらから問い合わせなければ回答する用意さえしていない有様だったので。

このような現状から「北大構内の外国人教師官舎のあった林の一隅に『心の会の碑』（仮称）を建てる」との約束を実現するのは極めて困難な状況にあるとご報告せざるをえません。

したがって、本件事務局であると同時に、建碑運動を最初に提起した本会といたしましては、いま一度整理整頓し直したうえで今後に当たりたいと考えております。その折には、改めてお願い致したく思いますので、なおしばらくお時間を頂きたく、お願い申し上げます。

北大は、この間、その一面において「二度と戦争を起こさせない」（事件を）風化させない」との認識を示すとともに、昨年5月7日の話し合いの席上では「宮澤事件は冤罪であった」ことを正式に認め、外国語習得にすぐれ国際親善の精神にふさわしい学生に授与する「宮澤賞」の創設を宮澤弘幸の遺族・秋間美江子さんと私たちに約束しました。

しかし、その半面では自大学の学生であって宮澤弘幸を守ることが出来なかったことに対する謝罪と責任明確化には応えず、また建碑には応じないなど、ちぐはぐさが露わで、真意を窺いかねる現状にあるのも事実です。

「真相を広める会」としては、こうした現状をもふまえ、呼びかけ人のみなさまと共に今後に対処して行く考えでおります。賛

同者のみなさまのご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

2015年4月20日

\*以上、補訂第二版から収録。原典では、北大との間でやり取りした全文書の写しを添付収録しているが、これらは割愛した。参照ページの数字は原典中のままで、本編ページとは一致しない。

北大との関係は、以来進展なく途絶えたままとなっている。宮澤賞についても受賞者の名前がホームページに載っている程度で、記念行事も風化をさせない活動も行われた気配がない。レーン賞も図書券程度に縮小されているようだ。